

1. 案件の概要	
事業名（対象国名）： 生物資源の持続可能な利用による地域住民の生計向上支援プロジェクト（アルゼンチン共和国）	
事業実施団体名： 一般財団法人自然環境研究センター	分野： 自然環境保全
事業実施期間： 2012年5月8日から2017年4月30日まで	事業費総額： 101,552千円
対象地域： フォルモサ州パティーニョ郡ラス・ロミータス市 およびその周辺地域	ターゲットグループ： 直接受益者：パティーノ郡ラス・ロミータス地区の生物資源を持続的に採取・ランチング活動を行っている住民 間接受益者：ラス・ロミータス近隣地区住民
所管国内機関：東京国際センター	カウンターパート機関：アルゼンチン生物多様性財団
<p>1-1 協力の背景と概要</p> <p>2000年初頭の経済危機を脱したアルゼンチンはポスト BRICS の有力候補となっている。アルゼンチン全体で見れば経済発展著しい中進国の位置付であるが、地域格差、経済格差が大きな問題となっている。</p> <p>アルゼンチンの森林は国土の11%を占めるにすぎず、フォルモサ（Formosa）州を中心としたチャコ生態系の北部と、南西部のアンデス山地沿いに分布するのみである。アンデス山地の森林の多くは、国立公園などとして保全されている。しかし、チャコ（Gran Chaco）地方の森林域をカバーする保護区は少なく、その保全と持続可能な利用が求められている。フォルモサ州は自然がアルゼンチンの中でも豊富に残されており、その保全が必要であり、また貧困地域への支援という視点から、協力の必要性の高い地域と判断した。</p> <p>本事業ではアルゼンチンの北東部、パラグアイに接するチャコ地方のフォルモサ州を対象とし、中でも先住民、貧困住民人口の多い、パティーニョ（Patiño）郡のラス・ロミータス（Las Lomitas）地区を重点対象地域とした。</p> <p>生態系区分としてはエストレージャ湿地（El Bañado La Estrella）と呼ばれる、パラグアイ川の右岸に位置する湿地生態系とその周辺のチャコ地方亜熱帯林を対象とした。フォルモサ州は、南緯 22°～27°、西経 57°～63°の地域に位置し、面積は北海道に匹敵する 72,066km²を有するが、人口は約 48万7千人にとどまる。北側はパラグアイ国境のピルコマージョ川、南側はベルメホ川が州境界となっている。人口の17%が先住民で、その42%が貧困層といわれている。エストレージャ湿地は、フォルモサ州の北西部にパラグアイ川と並行して、北西から南東方向に向かって細長く広がっている。その面積は約 40万 ha（幅約 10 km、長さ 400 km）に達する。季節的な水位変化により湿地面積は変動し、乾季には乾燥するところも多いため、周辺は放牧、小規模な畑作、森林資源利用（伐採、製炭）、および野生生物を含むその他伝統的な資源採集地として利用されている。</p>	

フォルモサ州の産業は、綿・大豆・トウモロコシ栽培や放牧および林業といった第一次産業が主である。大消費地である首都ブエノスアイレスから 1,000km 以上離れており、流通システムも整備されていないことから、その多くは地域内消費で終わっており経済的に一次産業は低迷している。また州の北西端にピルコマージョ川国立公園 (Rio Pilcomayo National Park; 47,744 ha) が設置されているが、国立公園周辺地域を含め、フォルモサ州では、ツーリズム施設と観光プログラムはまだほとんど開発されてない。

フォルモサ州隣接のミシオネス州には世界遺産に指定されているイグアスの滝やサン・イグナシオ遺跡などがあり多くの観光客が訪れている。また、アルゼンチン南部にはやはり世界遺産のパタゴニア氷河公園やバルデス半島があり観光産業が地域経済の大きなウェートを占めているが、フォルモサ州では観光産業はまだ未発展である。

以上述べたような中進国としてのアルゼンチンにおける国内格差問題と自然環境問題という視点に立ち、プロジェクト実施サイトとしてフォルモサ州を取り上げた。

フォルモサ州の一人当たり GDP (2007 年時点) は、4,280 USD と全国平均 6,040 USD に比べ低い水準にとどまっており、貧困人口の割合もアルゼンチンの平均が 12.0% であるのに対して、フォルモサ州を含むアルゼンチン北東部では 21.8% と全国平均の 2 倍程度高く、アルゼンチンの中でも最も貧しい州のひとつである。

更に、貧困であるが故に周りにある豊富な生物資源を収奪し、それがまた貧困度を深めていくという負のサイクルに陥りつつあるフォルモサ州において、生物資源の持続的利用により地域住民の生計向上を図ることが、生物資源の保護へとつながり、そのことが更なる地域住民の生計向上へとつながっていくという好適サイクルへと変換することが急務である。しかしこの変換はアルゼンチン国内の経済システムだけでは解決しえない問題であり、我が国や他の先進国のマーケットとつないでいくといった国際的な視点に立った協力が必要であると考え、実施に至った。

1-2 協力内容

(1) 上位目標

自然環境を保全しながら地域住民の生計向上を図る好適サイクル・インセンティブが強化され、フォルモサ州のチャコ生態系が保全される

(2) プロジェクト目標

持続可能な自然資源利用が地域住民の生計向上につながる仕組みが整うことにより、ラス・ロミータス市及びその周辺地域の自然環境保全の基盤が整えられる

(3) アウトプット

1. イエロー・アナコンダを対象とした持続可能な生物資源活用事業が実施される
2. パロ・サント等を対象とした持続可能な生物資源活用事業が実施される
3. ラス・ロミータス市及びその周辺地域の自然環境と生物を対象としたエコツーリズム活動が実施される
4. ラス・ロミータス市及びその周辺地域を対象とした環境保全計画が作成される
5. 環境教育の実施により自然保全及び持続可能な資源利用にかかる地域住民の認識が深まる

(4) 活動

- 1-1. イエロー・アナコンダハンターのグループ化
- 1-2. イエロー・アナコンダ資源の現状調査
- 1-3. イエロー・アナコンダ資源活用のための技術移転と人材育成
- 1-4. 皮革の輸出先の拡大（認証制度構築、販路開拓）
- 2-1. パロ・サント等活用事業に係るグループ化
- 2-2. パロ・サント等資源の現状調査
- 2-3. パロ・サント等資源の有効利用の可能性調査
- 2-4. パロ・サント等資源活用のための市場分析、商品開発、製造方法の検討
- 2-5. パロ・サント等資源確保のための植林
- 3-1. エコツーリズム資源活用事業に関わる人々の組織化
- 3-2. ツーリズム資源と施設調査
- 3-3. エコツーリズム資源活用のための技術移転と人材育成
- 3-4. 類似事業を実施している他地域との連携体制の構築 ・イグアスプロジェクト観光組合との協力・連携、情報交換
- 4-1. ラス・ロミータス市及びその周辺地域の生態系調査と調査手法の技術移転
- 4-2. ラス・ロミータス市及びその周辺地域の保全計画作成・実施
- 5-1. 環境教育に係るボランティアグループの設立
- 5-2. 教材開発、環境教育実践

2. 評価結果

妥当性

フォルモサ州を含むグラン・チャコ生態系の森林域をカバーする保護区は少なく、アルゼンチンの中で貧困率が極めて高いフォルモサ州において、自然環境の保全・持続的利用及び地域住民の生計向上を目指した本事業の実施の意義は高い。

フォルモサ州政府は観光業の振興を通じ、自然環境保全・持続的利用及び地域住民の生計向上を目指しており、保護区の制定、湿地の開拓、ゾーニングによる土地利用の規制に取り組んでいる。本事業で実施したイエロー・アナコンダ保全の為に基礎的情報収集や、持続的利用を目指した諸活動、不法伐採や製材所において有効利用されていない廃材を利用したパロ・サント等の持続的利用、資源量調査を通じた保全活動、エコツーリズムの実施とエストレージャ湿地の認知度と高める為の諸活動、上記 3 点を合わせたエストレージャ湿地の保全計画作成・フォルモサ州政府への提案、豊かな自然環境に恵まれているプロジェクト地域住民の環境への意識を高める為の環境教育は、それぞれのテーマが現地のニーズに叶う内容であり、妥当だったと考えられる。また、2016 年の州選挙以降、フォルモサ州政府観光省がエコツーリズム推進を積極的に始め、その推進重点地域として、本事業の対象地でもあるラス・ロミータス市とフォルティン・ソレダー村が選定されたことは特筆に値する。

実績とプロセス

投入は概ね計画通りに行われた。成果毎の達成状況は下記の通り。

<成果1：イエロー・アナコンダを対象とした持続可能な生物資源活用事業が実施される>

イエロー・アナコンダはワシントン条約 (CITES) II 類に属し、2002 年より管理プランが導入された。以降、本事業のカウンターパート機関であるアルゼンチン生物多様性財団 (以下、FB) が中心となって実施している資源調査をもとに州政府が毎年策定する管理プランに沿い、狩猟が行われている。本事業では、FB とともに、ハンターに対しその年の狩猟期間・狩猟可能個体サイズ・皮革の切り方等についての説明会を実施し、生態調査/ラジオ・テレメトリー調査を行い、一定の成果を得た。他方、日本におけるイエロー・アナコンダ皮革商品の試作及び販路開拓、認証制度に係る取り組みについては、現時点では販路開拓中であること、また収益が発生していないため認証制度の稼働には至っていないことから、事業終了後も実施団体によるフォローアップが必要である。

指標 1-1 ハンターグループが少なくとも 1 地区で結成される：達成

2016 年 1 月にフォルティン・ソレダー村において、ハンター 8 名によるハンターグループが結成された。同グループの現在の役割はハンター間の情報共有にとどまるが、今後、指標 1-4 で後述の認証制度が本格導入されれば、利益還元を受け皿となることが見込まれている。

指標 1-2 ハンターグループが少なくとも 2 種類の資源調査方法を習得する：達成

エストレージャ湿地にて、ラジオ・テレメトリーによる追跡調査、生態調査を実施した。ハンターグループメンバーのうち 2 名が調査に同行し、調査手法を習得した。

指標 1-3 イエロー・アナコンダ皮革の日本国内での販路が開拓される：未達

2015 年 12 月にイエロー・アナコンダの皮革 50 枚を輸入し、日本国内でサンプル商品 (手帳、財布、名刺入れ、トートバッグ等) を制作した。その後、民間企業に販売委託され、販路開拓中。

指標 1-4 皮革の環境配慮型認証制度を持続的に実施する体制が確立される：達成

実施団体と FB 間で環境配慮型認証制度の仕組みを整理し、覚書を締結した。認証制度では、イエロー・アナコンダ皮革商品に産地証明及び環境保全に貢献する旨を示すタグを付け、その売り上げの一部をハンターグループに還元し、現地住民の生活改善に役立てることを目指す。

<成果2：パロ・サント等を対象とした持続可能な生物資源活用事業が実施される>

パロ・サントは、ワシントン条約 II 類に属している。当初、建築用資材として伐採されたパロ・サントの端材から精油を抽出し、日本における販路開拓を行う予定であった。しかしながら、隣国パラグアイにおける輸出禁止措置の煽りを受け、アルゼンチン国内でも政府によるパロ・サント輸出許可が実質停止され、流通が停滞し、パロ・サント端材の入手が困難な状況が続いているため、これを活用した事業を行うことは困難であった。

他方、フォルモサ州にはパロ・サント以外にもさまざまな有用植物があることが確認されており、それらの検証と利用が期待されている。

指標 2-1 パロ・サント等の資源調査結果が取りまとめられる：達成

2016年7月にフォルモサ国立大学、FBと共に、フォルティン・ソレダー村近辺において、パロ・サントの資源量調査が行われ、結果が報告書にまとめられた。調査より、対象地であるフォルティン・ソレダー村近郊のパロ・サント伐採は、樹木の選択、伐採量ともに過度に行われてきたため、良い状態のパロ・サントはなくなっていたこと、健康な状態の木や若い木の数は非常に少なく、再生に多くの時間を要すると考えられることがわかり、より厳格な管理計画が必要であることが確認された。

指標 2-2 パロ・サント端材からの精油抽出技術が確立する：達成

パロ・サント端材からの精油抽出実験を経て抽出技術が確立し、作業手順書を作成。関係機関へ共有された。

指標 2-3 パロ・サント精油・サンプルの成分分析により製品としての有用性が実証される：達成
成分分析・有効性の検証を行ったところ、美白目的の化粧用製剤を回収可能であることが示された。

指標 2-4 パロ・サントを含む有用植物のリストアップが行われる：達成

有用植物リストを作成し、州政府およびラス・ロミータス市関係者、大学関係者に共有された。

指標 2-5 パロ・サント等の植林活動を持続的に行う仕組み・体制が整う：未達

パロ・サントについては、苗木を入手することができなかった。フォルモサ国立大学にて組織培養による苗木育成を試みたものの発芽せず、断念することとなり、パロ・サントの植林は行っていない。他の樹木については、2014年、2015年、2016年のエコツーリズムのモニタリング調査実施時に、フォルティン・ソレダー村にて、地域住民と共にアルガローボ(*Prosopis alba*)、グアジャカン(*Gaespalinia paraguariensis*)を植林した。

当初、フォルモサ国立大学(自然資源学部)、FBと連携し、植林を行う仕組み・体制を整えることを目指していたが、現在のところ持続的に植林活動を行う具体的な機関及び計画は確認されていない。将来的には、パロ・サント等に係る管理計画が策定され、州の管理のもと植林が計画されることが望ましい。

<成果3: ラス・ロミータス市及びその周辺地域の自然環境と生物を対象としたエコツーリズム活動が実施される>

エコツーリズムは、州政府、ラス・ロミータス市、地域住民それぞれからの期待が高い分野であった。2013年以降、実施団体が運営協力している東京環境工科専門学校の生徒が毎年10~15名が訪れ、モニタリングツアーを実施している。本事業によるエコツーリズムの活動の成果は州政府の観光開発計画2020に反映され、また、米州開発銀行(以下、IDB)からのビジターセンター建設に係る資金獲得に貢献するなどのインパクトを得た。

指標 3-1 ラス・ロミータス市及びその周辺地域においてエコツーリズムに関心を有する関係者が増加

する：達成

当初、フォルティン・ソレダー村でエコツーリズムに関わる関係者は 2 名のみであった。現在も中心的に活動しているのは 2 名であるが、モニタリングツアーや一般観光客受け入れを通じて関心が高まり、必要に応じて協力する者が 10 名ほどに増加した。

指標 3-2 エコツーリズムの対象となり得る観光資源が発掘される：達成

フォルモサ州内でエコツーリズムの観光資源となる場所や施設をフォルモサ州政府、地域ガイド、FB と共に訪問し、観光資源としての特徴をまとめた観光資源リストを作成し、モデルプログラム作成を行った。

指標 3-3 地域住民の中からツアーガイドが少なくとも 2 名育成される：達成

フォルティン・ソレダー村の住民 2 名がエコツーリズムガイドとしてモニタリングツアーや一般観光客の受け入れに参加し、自然解説やカヌー活動などを行う中で、ガイドとして必要な知識・自然情報の伝え方などの経験と知識を習得した。

指標 3-4 日本人を含む外国人観光客及び国内観光客用のガイドブック、ホームページ及び植物及び昆虫図鑑が作成される：達成

エストレージャ湿地ガイドブック、リーフレット、観光資源リスト、植物図鑑、昆虫図鑑を作成し、州政府、観光客受け入れに関わる各施設、地域ガイドに共有した。また、観光客用にホームページを開設し、地域の観光・生物に関する情報を紹介している。

指標 3-5 日本人を中心にラス・ロミータス市及びその周辺地域を来訪する観光客数が増加する：正確な情報は得られていない。

ラス・ロミータス市には、観光客数を把握できるシステムは存在しなかったため、本事業ではラス・ロミータス市観光局とともに独自の方法で観光客数を調査していたが、事情により市の担当者が不在となって以降、観光客数の把握ができず、増加を示す情報は得られなかった。関係者によると、国道 81 号線の整備をきっかけに観光客や同州を訪れる人は増加傾向と見受けられるとのこと。また、フォルモサ州ではエコツーリズムを推進する方針を決定しているが、特に州を代表する観光地であるエストレージャ湿地の観光開発に力を入れており、最寄りの町であるラス・ロミータス市およびフォルティン・ソレダー村は観光開発の重点地域に指定されている。州政府は SNS や広報誌の発行を通じた広報活動にも力を入れており、今後、ラス・ロミータス市及び周辺地域を訪問する観光客数の増加が期待される。さらに、エストレージャ湿地の一角には IDB の融資を受け、観光客用ビジターセンターの建設が決定しており、完成すれば観光地としての魅力が増すことが期待されている。

<成果 4：ラス・ロミータス市及びその周辺地域を対象とした環境保全計画が作成される>

成果 1、2、3、5 の経験を通じ、資源の持続的利用の重要性を関係者が理解し、環境保全計画に反映された。

指標 4-1 ラス・ロミータス市及びその周辺地域の生態系の科学的データが整理され関係者に共有される：達成

イエロー・アナコンダの調査結果、パロ・サントの資源量調査結果が州政府関係者に共有された。

指標 4-2 ラス・ロミータス市及びその周辺地域を対象とした環境保全計画の基本的な考え方が整理される：達成

持続的利用の重要性が関係者間で確認され、これを基本とする環境保全計画が整理された。

指標 4-3 同環境保全計画の基本的な考え方を関係者が共有する：達成

本事業で実施した各種調査や取り組み、その成果を報告書に取りまとめ、エストレージャ湿地の環境保全及び利用に係る提案を含めたものを、環境保全計画としてまとめ、本事業の集大成として州政府に共有した。

<成果 5: 環境教育の実施により自然保全及び持続可能な資源利用にかかる地域住民の認識が深まる>
環境教育やモニタリングツアーや一般観光客の受け入れを通じ、自然保全及び持続可能な資源利用に係る地域住民の認識は深まったと考えられる。

指標 5-1 ラス・ロミータス市及びその周辺地域において環境教育に関心を有する関係者が増加する：達成

ラス・ロミータス市及びフォルティン・ソレダー村の 2 つの学校において環境教育が実施された。ラス・ロミータス市では延べ 110 名の生徒と 14 名の教師が参加した。フォルティン・ソレダー村では、村に隣接するエストレージャ湿地を舞台に野鳥や風景、生き物の観察方法に関する活動が行われ、身近にある自然環境に関する意識の向上がはかられた。

指標 5-2 環境教育教材が整備される：達成

エストレージャ湿地ガイドブックおよびリーフレット、プロジェクト地域の植物図鑑および昆虫図鑑、プロジェクトのホームページが作成された。

指標 5-3 環境教育セミナー／イベントの実施により、ラス・ロミータス市及びその周辺地域の自然保全の必要性を認識する地域住民の数が増加する：達成

フォルティン・ソレダー村におけるモニタリングツアー時に植林イベントを実施し、地域ガイドや村の住民 18 名が参加したほか、地域住民や学校向けに地域の生物資源の持続的利用に関するイベント（針のないミツバチの養蜂）を企画・実施した。また、一部の住民はイエロー・アナコンダ調査やパロ・サント資源調査に参加し、自然環境に対する保全意識の向上が図られた。訪問客受け入れに係る活動、各種イベントを通して、地域の魅力に改めて気付くこととなり、地域住民の自然環境に対する意識が高まったと期待される。

効果

本事業は自然環境保全と持続的利用を推進する州政府の方針と合致しており、関係機関の期待が高い内容であった。本事業の活動（パロサント、アナコンダ）を通して持続的利用の重要性が州政府関係者及び地域住民に理解され、エコツーリズムに関しては、本事業の活動を通して州政府が目指すエコツーリズムの方向性が明確になった。また、ビジターセンター建設に係る IDB 資金獲得のためのプレゼンテーションや観光計画 2020 の策定に貢献できたことは特筆に値する。外部条件により、一部当初目標を達成できなかったものもあるが、本事業により目指していた目標は概ね達成したといえる。

指標 1 生物資源（イエロー・アナコンダ及びパロ・サント）に付加価値を与え、地域住民の生計向上を実現するための新しい仕組みや活用技術が実証される：事業終了後に達成見込み

イエロー・アナコンダ事業については、ハンター8名から成るハンターグループが組織され、商品の収益の一部をハンターグループに還元する仕組みが整えられた。現在、商品の販路開拓を行っている段階であり、実証は事業終了後となる予定。パロ・サントについては外部条件により活用できない状況であるが、精油抽出技術は確立しており廃材活用の可能性が示された。これは他の有用植物にも応用可能であると期待されている。

指標 2 自然資源を活用したエコツーリズム事業の方向性が明確になる：達成

フォルモサ州政府及びFBと連携して、2013年より日本人モニタリングツアーが4回行われ、地域住民は食事や宿泊場所の提供、ガイドとして活躍するなど受入に参加した。ツアー参加者に対するアンケート結果をフィードバックすることで内容の改善が図られ、自然資源を利用したエコツーリズム事業の確立を行うための意識醸成およびモデル作りがなされた。

指標 3 ラス・ロミータス市及びその周辺地域の自然保全に対する地域住民の意識が向上する：達成

環境教育、エコツーリズム、イエロー・アナコンダに係る活動、植林等の様々な活動を地域住民とともに実施し、また各種セミナーを実施したことで、地域住民が自分たちの周囲にある自然資源の価値に改めて気づき、その保全に係る意識が向上した。また、生態系保全が住民の生計向上に寄与する事に関して、理解が深まった。

指標 4 上記1～3を含むチャコ生態系の環境保全計画策定に資する報告書が州政府に提出される：達成

成果 1、成果 2、成果 3、成果 5 の活動を通じてチャコ生態系の生物資源の持続的利用を基盤とした環境保全計画がフォルモサ州政府生産及び環境省に提出された。

持続性

事業終了後は現地人材による活動の継続が期待されるが、一部の活動においては事業終了後も引き続き実施団体によるフォローアップが必要である。その他の活動については、州政府や現地関係者によって継続される見通し。

<イエロー・アナコンダに係る活動>

イエロー・アナコンダのハンターは十分な知識・技術を習得しており、今後もルールに則った狩猟活動を継続すると見込まれる。一部のハンターは、ラジオ・テレメトリーによる追跡調査や生態調査に係る調査手法についても習得しており、調査時に活躍が期待される。

イエロー・アナコンダ皮革の日本への輸入、日本におけるイエロー・アナコンダ皮革製品の市場確保については、販路開拓に向けて実施団体によるフォローアップがなされている。

<パロ・サント等に係る活動>

パロ・サントについては、上述の通り外部要因により現時点では活用できない状況である。他の有用植物については、日本の民間企業が CSR の一環として商品開発に取り組むことに関心を示しており、INTA（国立農牧技術院）との MOU 締結に係る調整等、実施団体によるフォローアップが行われている。

<エコツーリズム>

本事業の成果が州政府の観光開発計画 2020 に反映され、エコツーリズムのコンセプトや活動の成果が州政府により発展的に継続されることが期待されている。フォルティン・ソレダー村では、本事業を通してガイドやツアーリスト受け入れに必要な人材が育成され、今後も観光客の受け入れを積極的に行っていく姿勢が確認されている。また、本事業で作成した各種図鑑、ツーリズムガイドブック、リーフレットは、州政府観光省はじめ関係各機関に配布され、活用が見込まれている。

3. 市民参加の観点からの実績

実施団体は、実施団体と連携関係にある東京環境工科専門学校にて、事業説明や報告会を行った他、同学校の海外実習の一環として、プロジェクト期間中毎年 10-15 名が 4 度にわたり現地活動を実施した。学生たちは、エコツーリズム資源発掘や環境教育で地元の子どもたちと生き物調査を実施し、有用植物の植林活動などを行った。日本の若者にとっては太陽が地平線に沈む広大な光景、ワニやイエロー・アナコンダ、数百の鳥類、多種多様な昆虫類を身近に観察できたこと、地元の人々の生活に触れたことは強烈なインパクトを与えた。海外実習を終えた若者の中には、アルバイトで旅費を賄い、現地に舞い戻って 1 年間以上ボランティア活動をした者が 4 名、1 か月間の現地活動をした者が 2 名いた。草の根事業は現地への貢献、協力活動も然ることながら日本の若者たちが異文化に触れたり、日本とは違う自然との付き合い方を学ぶ絶好の機会でもあった。

4. グッドプラクティス、教訓、提言等

(1) 事業のデザイン・PDM（ロジック）の重要性

中間レビュー調査において専門家チームと協議の上、PDMのロジックを整理した。特に各アウトプットが最終的にどうプロジェクト目標の達成につながっていくのかについて、それまで関係者間でコンセンサスが形成されていなかったことが、プロジェクト運営の大きな阻害要因になっていた。プロジェクト管理の“共通言語”としてのPDMの重要性を改めて認識した。プロジェクト開始後に実施計画レビュー調査を行う際に、プロジェクトの枠組みについてしっかりと議論しておくことが必要。

(2) 生計向上と保全の双方向の取り組みの重要性

住民がいる地域において自然環境保全を目指す際、啓発活動や保全に偏った対策のみでは実効性に乏しく、住民に経済的メリットが伴うようなシナリオ作りが重要である。その観点から、イエロー・アナコンダ、パロ・サント等の有用植物、エコツーリズムなど様々な分野において、住民の生計向上に資する持続的利用のモデルを示すことの意義は大きかった。

(3) 関係機関との相乗効果

政府関係機関の政策と事業の方針が合致することで協働でき、双方にとってメリットがあり相乗効果が得られ、より大きなインパクトが得られた。持続性の確保の観点からも草の根技術協力事業においても可能な限り政策との合致を試みることを望ましいことを改めて確認した。

(4) プロジェクト外（事業費外）の投入との相乗効果

「成果3：エコツーリズム」については、東京環境工科専門学校からの学生ツアーの受け入れを通じて日本人観光客の視点から観光プログラムの検証を行い、そのことが同プログラムの改善につながった。また、実施団体によるインターンの投入が図鑑やホームページ等の成果品の完成につながった。さらに、実施団体の有する民間企業とのパイプが、イエロー・アナコンダ皮革や有用植物の日本国内販路開拓の可能性を大きく広げる結果となった。これらはプロジェクトの直接的な投入ではないが、受託団体の比較優位性を活かしたプロジェクト外の投入との相乗効果については特筆に値する。